

2012年2月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 真の人間として生きる

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「方便品－2」

### 1. 方便品の構成

- (1) 釈迦牟尼世尊が瞑想を終えて、教えを説き始めますが途中で止めてしまいます。説法を止める間に十如是を説きました。
- (2) 舍利弗が熱心にお願ひした（三止三請）ので、釈迦牟尼世尊が再び教えを説き始めます。そのとき、5000人の修行者が一斉に退出しました（五千起去）。
- (3) 釈迦牟尼世尊は、諸仏出世の一大事因縁を、開・示・悟・入の四仏知見として説きます。
- (4) 引き続き釈迦牟尼世尊は、開三頭一の宣言をなさいます。
- (5) 譬諭品に入り、釈迦牟尼世尊は舍利弗に授記します。

### 2. 諸仏の願ひ

#### (1) 諸仏出世の一大事因縁

諸仏がこの世に出られる目的はただ一つであるということです。諸仏はただひとつの大事な願ひを持ってこの世に出られます。それは、あらゆる人々に仏の智慧を得させて、真の人間としての生き方に目覚めさせたいという願ひです。

#### (2) 開・示・悟・入

##### ① 開仏知見

諸仏は、万物万象の実相を見とおしている仏の智慧に、すべての人の目を開かせ、清らかな心を得させたいという願ひをもって世に出られる。

##### ② 示仏知見

諸仏は、仏の智慧の廣大無辺さを、すべての人に示そうという願ひをもって世に出られる。

##### ③ 悟仏知見

諸仏は、仏の智慧をすべての人に、自らの体験によって身にしみて悟らせようという願ひをもって世に出られる。

##### ④ 入仏知見

諸仏は、仏の智慧を成就する道へ、すべての人を導き入れようという願ひをもって世に出られる。

#### (3) 菩薩

「仏の智慧を成就する道」に入った人は「菩薩」です。諸仏はすべての人を「菩薩」にしたいのです。

### 3. 「開・示・悟・入」の考察

#### (1) 仏の智慧の素質が覆われている

- ① 人には「仏の智慧」の素質があるのですが、さまざまな障害に覆われています。
- ② 仏の智慧の素質を覆っている障害は、自分本位、執着、自己主張などの迷いです。また、こうした迷いから生じる数々の煩惱・随煩惱です。
- ③ 仏の智慧の素質が覆われている人は、自分本位の欲望や自己主張に明け暮れる生き方が、人間らしい生き方だと勘違いしています。このため、いつまでたっても六道（六つの心の状態＝地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）から抜け出すことができません。
- ④ 仏の智慧の素質が覆われている人は、仏の智慧で生きる話を聞いても、自分とは関係ないと思ひ、仏の智慧を学びたいという気持ちを起こしません。
- ⑤ 仏の智慧の素質が覆われている人が、仏の智慧で生きる人を目にすると、立派だなあと思うこともあります。怨み、憎しみ、妬みなどの気持ちを抱き、軽蔑したり、迫害を加えたりすることもあります。
- ⑥ 仏の智慧の素質が覆われているまま人生を歩む人は、憂悲苦悩の日々を重ね、そのまま一生を終えることとなります。

#### (2) 開仏知見

- ① 仏は、仏の智慧の素質が障害に覆われている人に対して、障害を取り除くように働きかけを行ないます。但し、あまりにも障害が深い人の中には、そっとしておくこともあります。
- ② 仏の働きかけを受け取れた人は、多少なりとも障害が取り除かれます。これによって、仏の智慧の素質が多少なりとも働きだします。これが「開仏知見」です。
- ③ 仏の智慧の素質が働きだしますと、ものごとの見えかたが変わってきます。  
同じ人を見ても、障害に覆われていたときは自分に害をもたらす面ばかりが見えていたものが、仏の智慧の素質が働きだすと自分に益をもたらす面が見えてきたりします。  
こうしたことから、心が安らぎ、喜びを覚えるようになります。

#### (3) 示仏知見

- ① 仏の智慧の素質が働きだした人に対して、仏は、ものごとの真実、真理を、具体的なものごとの実際を示しながら、はっきりと、分かりやすく示します。
- ② 仏から示された真実、真理を受け取り、理解した状態が「示仏知見」です。仏から教えていただいたことが分かったという段階です。

(4) 悟仏知見

- ① 仏から示された真実、真理を受け取り、理解した人に対して、仏は、その真実、真理を自分の身に当てはめてよく考え、自ら実践して体験するように導きます。
- ② 仏が示された真理を、自分の意思で学び実践した人は、真理を身に沁みて理解することができます。これによって、真理から離れずに生きていこうとする思いが定まります。
- ③ 「示仏知見」が、教えられて理解したのに対して、「悟仏知見」は自らの意志で学び、実行し、体験して理解するという主体的な段階になります。

(5). 入仏知見

- ① 「入仏知見」は、「仏知見の道に入る」で、仏の智慧の素質を育て上げ、仏の智慧を完全に悟ることを目指して修業の道に入ることです。
- ② 仏の智慧を完全に悟ることを目指して修業する人を「菩薩」と言います。仏は、あらゆる人が菩薩の道を歩むことを願っておられるのです。
- ③ 仏の智慧を完全に悟ることを目指して生きる人生が、真の人間として生きる人生です。すなわち、人間は常に上に向かって進むのが当たり前のありかたなのです。  
成長する、向上する、進歩する、発展する。これが、人間の生命の方向なのです。
- ④ 自分だけが仏の智慧を悟ろうと思っても悟ることはできません。人々と共に仏の智慧を求め、手を携えて歩んではじめて、仏の智慧を悟ることができます。仏知見の道に入った人は、人々を仏知見の道に入れ、共に歩む努力を続けます。

4. 三乗

(1) 三つのゆきかた

- ① 釈迦牟尼世尊は、長い間、「三つのゆきかた」で人々を導きました。三つのゆきかたを「三乗」と言います。
- ② 三乗とは「声聞乗、縁覚乗、仏乗（菩薩乗ということもあります）」の三つです。  
声聞乗は声聞の悟りを得るための修行の道。  
縁覚乗は縁覚の悟りを得るための修行の道。  
仏乗（菩薩乗）は仏の悟りを得るための修行の道。

(2) 修行の型（『法華三部経 各品のあらましと要点』参照p. 46）

人は自分の傾向にぴったりした教えに引き込まれて修業します。

声聞型の人：いい教えを聞いて迷いを去ろうとつとめる。

縁覚型の人：自分ひとりで瞑想・思索して道を切り開こうとする。

菩薩型の人：至上の悟りを求めると同時に大衆の救済運動に挺身しようとする。

## 5. 三乗で導いた理由

### (1) 成道直後の釈迦牟尼世尊の思索

「自分が悟り得た智慧は、この宇宙における最高の法であって、とうていことばに表現できるようなものではない。しかも、世の人々は機根が低く、快樂に執着し、愚かさのために、ものごとを正しく見るができないでいる。この人たちにむかって、いったいこの教えをどう説いたらいいのだろうか」（庭野日敬著『新釈法華三部経2』p.370～371）

### (2) 神々の要請

「そのとき、もろもろの梵天や帝釈天・四天王・大自在天などの多くの神々が、その眷属たちを引き連れてあらわれ、合掌して礼拝し、ぜひ衆生に教えを説いていただきたいと請うたのです」（同p.371）

### (3) 釈迦牟尼世尊の心配

「もしわたし（釈迦牟尼世尊）が、仏の悟りというものだけを賛嘆し、力説したならば、世の苦しみの中に沈み込んでいるおおくの人々は、とうていその教えを信ずることはできないであろう。（中略）むしろ、わたしがこの教えを説かないほうが、かえって安心な境地に達しやすいのではなかろうか」（同p.371）

### (4) 釈迦牟尼世尊の結論

「自分がいま悟り得た仏の道も、かつてもろもろの仏がなされたのと同じように、これを三つのゆきかたにわけて説くことにしよう」（同p.371～372）

## 6. 開三顕一

### (1) 開三顕一とは

開三顕一とは「声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の三乗を開いて一仏乗を顕す」ということです。

### (2) 開三顕一の宣言

如来は「すべての人を平等に仏の境地へ導く」というただひとつの目的のために、衆生に対して教えを説かれるのです。真実はほかにありません。二つの教えとか、三つの教えとか、そういう区別は本来ないのです。

### (3) 一仏乗

釈迦牟尼世尊はさまざまな方法をもって教えを説かれるけれども、目指すところはただひとつ、仏の境地です。

仏の境地に向かう修業の道を一仏乗と言います。一仏乗は、人間の真の生き方を示しています。

## 7. 方便

### (1) 方便とは

「方」は、正しいという意味です。「便」は、方法という意味です。「方便」とは、正しい方法という意味です。人を正しく導くために用いられる正しい方法を、方便と言います。

### (2) 方便における配慮

- ① その人のおかれたシチュエーションに応じて、方法を工夫します。
- ② その人の、機根・性質・欲望に応じて、方法を工夫します。
- ③ その人の到達すべき境地に応じて、方法を工夫します。
- ④ その人の理解する力、実践する力に応じて、方法を工夫します。

### (3) 方便と真実

- ① 方便は、真実を、相手に応じて適切に表現したものです。その内容は、真実そのものです。それゆえ、本人が真実に達していない人には、方便は使えません。
- ② 嘘も方便と言ったり、その場しのぎの方法、小手先の方法などを方便と言ったりしますが、これらはいわゆる俗語であって、本来の方便とは無関係です。

### (4) 導く側と導かれる側

- ① 方便で導く側は、対象者の現在の状態を知り、到達すべき状態までのプロセスを考え、適切な方法で導きます。
- ② 方便で導かれる側は、到達すべき状態やそこまでのプロセスを詳しくは知らないままです。ただ、次の一步、次の一步と、導かれるままに歩みを進めていきます。
- ③ 導かれる側が、到達すべき状態をはっきりと知り、そこまでのプロセスをはっきりと知って、自らの自覚で歩むようになれば、方便は必要ありません。

## 8. 授記

(1) 譬諭品のはじめに、「授記」ということがでてきます。「授記」とは、「記別を授ける」ということです。「記別」とは、「あなたも仏になれる」という保証のことです。

(2) 方便品の教えを聞いた舎利弗が、自分も仏になれるのだとはっきり自覚したので、釈迦牟尼世尊が、舎利弗はこれからしっかり修行して、華光如来という仏になれると保証します。

菩薩でない仏弟子が、釈迦牟尼世尊から、成仏の保証を授けられたのはこれが初めてでしたので、周りの仏弟子たちも大喜びしました。

(3) 記別を受けるということは、仏になる道を歩いて行けるということです。人間の真の生き方ができるようになったということです。

## 9. 人間の真の生き方

### (1) 庭野日敬師の言葉

庭野日敬師は、次のように語っています。

「今こそ、まさしく末法の時であり、人間が真の人間の生き方に目覚めなければならない時なのです。それでなければ、この世界を救うことはできません。その真の人間の生き方が、法華經に示された菩薩の生き方です」

(庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』p.4)

### (2) 菩薩の生き方

#### (1) 自他ともに

菩薩の生き方を簡略に言えば「人々を真理の道に導きつつ、自らも真理の道を歩む」と表現できると思います。

仏教には、自行化他（じぎょうけた）、自利利他（じりりた）、上求菩提下化衆生（じょうぐぼだいげけしゅじょう）などの言葉があります。

自他ともに向上する、自他共に救われるというのが、菩薩の生き方の基本路線です。

#### (2) 智慧に生きる

菩薩は、仏の智慧を学び、仏の智慧に生きる人々です。

菩薩の深い慈悲心は、仏の智慧と表裏一体の心です。

#### (3) 四弘誓願

菩薩は、つぎのような根本的な誓願を持って修業を続けます。

##### ① 衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）

一切の生きとし生けるものすべてを、さとの彼岸に渡そうと誓う。

人々を真理に導こうというもので、「下化衆生」に当たります。

##### ② 煩惱無量誓願断（ぼんのうむりょうせいがんだん）

一切の煩惱を断とうと誓う。

真理から外れようとする自分との取り組みです。

##### ③ 法門無尽誓願学（ほうもんむじんせいがんがく）

仏の教えすべてを学び知ろうと誓う。

真理を学び実践しようとする取り組みです。

##### ④ 仏道無上誓願成（ぶつどうむじょうせいがんじょう）

この上ないさとりに至ろうと誓う。

仏の境地に至ろうという決意です。上求菩提に当たります。

**【参考】 釈迦牟尼世尊の直弟子たち**

## 1. 仏弟子たちの修行

(1) 釈迦牟尼世尊御在世における直接の弟子たちは、次のような修行をしていました。

- ① 釈迦牟尼世尊から教えを受ける。
- ② 弟子たちが集まって、教えについて語り合い、理解を深める。
- ③ 木陰、洞窟などで、一人で瞑想に入り、教えを思索する。
- ④ 托鉢に出て食を乞いながら、人びとに教えを説き教化・救済する。

(2) その様子から、彼ら一人一人が、声聞の修行、縁覚の修行、菩薩の修行のすべてを行っていたと見ることができます。

## 2. 六人の阿羅漢

(1) 初期の經典に、次のような一節があります。

釈迦牟尼世尊が初めて教化した相手は、五人の修行僧たちでした。五人の修行僧たちは、釈迦牟尼世尊から教えを聞いたときのことです。

「五人の修行僧の集いはこころ喜び、世尊の所説を喜んで受けた。（中略）集うた五人の修行僧は執着なく、もろもろの煩惱から心が解脱した。そこでその時、世に六人の〈尊敬さるべき人〉がいることとなった」

六人の尊敬さるべき人とは、解脱した五人の修行僧と釈迦牟尼世尊のことです。五人の修行僧は、解脱して釈迦牟尼世尊と同じ境地に入ったのです。

(2) 釈迦牟尼世尊は、最初の説法（初転法輪）のときから、人々を釈迦牟尼世尊と同じ境地に導き入れることを願い、実際に行ってきたのです。